

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 1238 号	氏 名	花岡 吉亀
論文審査担当者	主 査 藤永 康成 副 査 関島 良樹 ・ 福島 菜奈恵 ・ 長島 久		

(論文審査の結果の要旨)

脳血管内治療、特に前方循環病変に対しては、解剖学的特性から大腿動脈アプローチが広く選択され、橈骨動脈アプローチは大腿動脈アプローチが困難な場合のみ、その代替として使用されているのが現状である。これまでに橈骨動脈アプローチを第一選択とした前方循環病変に対する脳血管内治療の報告はない。本研究の目的は、前方循環病変に対して 6Fr シモンズ型ガイディングシースを使用した橈骨動脈アプローチを第一選択とする血管内治療の実現可能性および安全性に関して評価した。

2018 年 6 月から 2019 年 9 月までに 148 症例 (148 病変) に対して、頸動脈ステント留置術または脳動脈瘤コイル塞栓術が施行された。これらのうち、橈骨動脈アプローチを第一選択とした 130 例 (右橈骨動脈アプローチ: 124 例、左橈骨動脈アプローチ: 6 例) を対象とした。橈骨動脈穿刺側、標的総頸動脈および大動脈弓の形態に応じて、6Fr シモンズ型ガイディングシースの標的総頸動脈への誘導方法が選択された。治療は全例全身麻酔下に施行された。6Fr シモンズ型ガイディングシースは治療直後に抜去し、穿刺部止血には止血デバイスを使用した。6Fr シモンズ型ガイディングシースの標的総頸動脈への誘導方法、成功率、治療成功率、周術期合併症および穿刺部合併症に関して、後方視的に評価した。

その結果、以下の成績を得た。

- 1) 標的総頸動脈は、右総頸動脈 69 例 (53.0%)、左総頸動脈 (bovine type) 6 例 (4.6%)、左総頸動脈 (nonbovine type) 55 例 (42.3%) であった。
- 2) 頸動脈ステント留置術は 75 例 (57.7%)、脳動脈瘤コイル塞栓術は 55 例 (42.3%) に実施された。
- 3) 標的総頸動脈への 6Fr シモンズ型ガイディングシースの誘導は、全 130 例において成功した。
- 4) 全例において大腿動脈アプローチに変更することなく、橈骨動脈アプローチにより治療は完遂された。
- 5) 無症候性橈骨動脈閉塞は 1 例 (1.5%) で認めたが、周術期合併症および穿刺部合併症は認めなかった。

以上より、穿刺側、標的総頸動脈および大動脈弓の種類に応じて 6Fr シモンズ型ガイディングシースの誘導方法を適切に選択することによって、橈骨動脈アプローチによる脳血管内治療は高い成功率と安全性を併せ持っていると考えられた。ゆえに、橈骨動脈アプローチを第一選択にすることの妥当性が示された。したがって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。